

応用研究論文

本荘キャンパスの薫風・満天フィールド交流塾における地域貢献と教育

— 効果的なアクティブ・ラーニングへ向けて —

廣田千明¹, 寺田裕樹¹, 間所洋和², 金澤伸浩³, 須知成光²

¹ 秋田県立大学システム科学技術学部電子情報システム学科

² 秋田県立大学システム科学技術学部機械知能システム学科

³ 秋田県立大学システム科学技術学部経営システム工学科

薫風・満天フィールド交流塾事業は2007年に採択された学生支援GPとしてスタートした。当初はアグリビジネス学科を中心とした活動であったが、2008年から本荘キャンパスも事業に参加し、現在まで継続している。本事業は「遊びを通して学生の人間力を向上させる」ことを目的としており、勉学に苦手意識をもっている学生でも気軽に参加できるという特徴がある。近年、大学教育には学生が主体的に学修する仕組みが求められている。そこで、我々は本事業を活用して、学生の主体性を伸ばすことを考えた。主体性の教育という観点で見ると、本事業の活動の中で特に地域貢献活動が有効である。これは、地域貢献活動は有能感や達成感が得やすいためである。実際、本事業を活用した地域貢献活動は成功を収め、学生の主体性が向上し、様々な活動へと発展している。本稿は本荘キャンパスにおける薫風・満天フィールド交流塾の活動内容とその学生教育に対する効果を紹介するものである。序章では、薫風・満天フィールド交流塾事業の目的を説明する。第1章は本事業が本荘キャンパスで開始された経緯を説明する。第2章はこれまで実施した活動の内容を紹介する。第3章は活動の成果についてまとめる。

キーワード: アクティブ・ラーニング, 課外活動, ボランティア

現代社会は産業に関しても技術革新に関しても非常に変化の激しい時代だと感じられる。このような状況において、大学教育の責務は、急激な変化にも柔軟に対応し、どのような状況でも自分の持っている力を発揮できる人材の育成であると考えられる。中央教育審議会答申（中央教育審議会大学分科会大学教育部会、2012）では予測困難な時代にあって生涯学び続け、主体的に考える力をもった人材の学士課程教育の質的転換が唱えられ、受動的な学修ではなく、能動的な学修（アクティブ・ラーニング）による教育が求められている。ここでアクティブ・ラーニングとは、授業担当者が一方的に授業内容を伝える授業以外を指し、プロジェクト・ベースド・ラーニング（PBL）のような授業形態そのものが異なる授業から、授業の中にディスカッションや学生

のプレゼンテーションを組み込んだ授業まで、様々な授業がアクティブ・ラーニングに該当する。アクティブ・ラーニングには学生の能動的活動が含まれており、教員と学生が双方向に意思疎通を図りながら、授業を進めるという特徴がある。

著者の経験では、アクティブ・ラーニングに向けて、授業中に学生に積極的に語りかけると、語りかけに応じてコミュニケーションの取れる学生もいるが、多くはどう応えていいかわからず戸惑ってしまう学生が多いと感じている。これは学生自身の意識が授業に対して受け身であることが原因で、どのような姿勢で授業を受けることが好ましいのかよくわかっていないからだと考えられる。したがって、授業中のコミュニケーションの取り方も初年次教育や第1セメスタの授業などにおいて身につけさせる必

要があると考えられる。

他方で、授業の受け方かわからず授業中に語りかけても何も反応を返さない学生であっても、サークル活動のような学業以外の活動では、ある程度主体的に活動している場合が見られる。このような学生に対しては、サークル活動などで主体性を伸ばし、それを授業に対する主体性や意欲につなげていくことが効果的であると考えられる。石田と亀山(2006)は、対象が中学生ではあるが、部活動が学習意欲を高めることを示しており、課外活動を通じた教育に効果があることを示している。したがって、きっかけとして学業ではない活動に参加を促し、その活動の中で、主体性や授業への参加の仕方など、学業に対する動機を育てることが効果的であると考えられる。

以上の理由により、学業以外の活動の実施により学生の主体性を伸ばす活動は効果的であると考えられる。学業以外の活動にはいろいろな活動が考えられるが、ここでは特に地域貢献活動に注目する。地域貢献活動が教育的によい部分は、その活動を成功させることによって地域の方から感謝され、有能感や達成感が得られやすい点が挙げられる。有能感や達成感が得られると次第に活動の動機が向上し、主体的に活動するようになると考えられる。

そこで、2007年度に文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)」に採択された「薫風・満天フィールド交流塾が育む人間力」の活動を利用し学生の主体性を向上させることを考えた。本稿はこの活動の内容と効果を論ずるものである。

本荘キャンパスでの薫風・満天フィールド

交流塾の活動の歩み

薫風・満天フィールド交流塾事業は文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)」の一つとして2007年度に採択された事業である。事業の正式名称は「薫風・満天フィールド交流塾が育む人間力」で2010年度まで文部科学省の支援を受け実施された。この事業は本学生物資源科学部アグリビジネス学科を中心に開始された

事業であるが、2008年度より著者の所属するシステム科学技術学部も事業に参加した。2010年度までで文部科学省の支援は終了したが、その後も大学の予算で現在まで継続している。

この事業は「遊びを通して学生の人間力を向上させる」ことを目的としている(秋田県立大学薫風・満天フィールド交流塾運営チーム, 2012)。したがって、「遊び」と「人間力」がキーワードとなる。

はじめに「遊び」について説明する。一口に「遊び」と言ってもかなり広い意味を有しているが、農学系のアグリビジネス学科が中心になって実施していたこともあり、溪流釣り、きのこ狩り、燻製作りなど、自然や農業と結びつく「遊び」を中心としてスタートした。事業開始当初はシステム科学技術学部でもこの流れに則り、雪合戦を実施したり、天体観測をしたり、地元の祭の運営に協力するなどしていた。その後、文部科学省からの支援がなくなった2011年からは科学教室の実施や除雪ボランティア、被災地支援など、地域貢献活動を通じた教育がメインとなり、この時期に学生の挑戦する心を支援する「学生チャレンジサポート制度」も設立された。

次に「人間力」について説明する。ここでいう「人間力」の向上について説明すると、これは行動力と創造性に富み社会性豊かな人材を育成することを意味している。このような能力が向上しているかが本事業の成否の鍵となる。

次節では、具体的な活動内容について報告し、その成果について論じる。

薫風・満天フィールド交流塾における地域貢献活動

2008年から現在に至るまで数々の活動を行ってきた。活動の一覧を付録Aから付録Eに与える(なお、近年の活動内容については、秋田県立大学薫風・満天フィールド交流塾(2013)を参照)。これらの活動の中で特に地域貢献と学生の教育について顕著なものについて詳しく説明する。

スノーウォーズからホップ・ステップ・キャンパスの協力へ。

この活動はシステム科学技術学部での薫風の最初の活動である。当時はなにかからスタートしていいの

かも分からず、まず1年生の有志10名程度を集め、著者である金澤、廣田や就職情報センターの熊谷朋子氏（現ノースアジア大学）や学生相談室の石塚幸一郎氏（現北海道メンタルケアセンター）と共に2週に1度くらいの頻度で会議をしながら、実施内容を決定した。GPの主旨から自然をテーマにすべきであるという思いが強く、まずは雪合戦をして「遊ぶ」ことにした。なお、「スノーウォーズ」という名前は「スターウォーズ」をもじって学生が命名したものである。雪合戦の実施にあたり、道具の調達や安全性について学生が自主的に活動し、実現までこぎつけた。実施当日は様々な学科から30名の学生が参加し、大いに盛り上がった。スノーウォーズの様子を図1に与える。



図1 スノーウォーズの様子。

またイベントを開催することが始めてであるため、実施に先立ちイベントの運営について勉強しようという観点から、本荘キャンパス前の飛鳥大通りで毎年開催されているホップ・ステップ・キャンパスに参加することにした。このイベントは、南内越アドベンチャースクールという元PTAの方が運営する団体が主催するイベントで、子供たちとミニかまくらを作製して灯をともしイベントである（図2）。初めに参加した2009年には、単純に参加者として参加し、雪像づくりやミニかまくら作りを体験し、南内越公民館での打ち上げに参加させていただき、イベント運営の苦労話を聞くにとどまったが、翌年の2010年からは学生が提供できる企画として、廃油からのろうそく作り教室を始めることとなった。

ホップ・ステップ・キャンパスは本荘キャンパス前の空き地にミニかまくらを作り、その中にろうそくを灯すイベントである（図2）。このイベント用のろうそくを、家庭から出る廃油から作ることを考えて、廃油を凝固剤で固めてろうそくとするのであるが、凝固剤の分量は調整が必要で事前に何度か実験を行った。また、ろうそくの芯も適度に油を吸い上げる必要があり、タコ糸や紙紐など、いろいろな材質を試す必要があった。この指導は金澤があたったが、ろうそく作りに関する試行錯誤は学生が主体的に考え、行動し、分量や方法が決められた。実験の様子を図3、4に与える。この活動は翌年にはさらに規模を拡大し、ミニミニ科学教室という5テーマ程度の科学教室へと発展し、現在まで継続している。学生の主体的な活動が地域貢献につながった事例となっている。



図2 ホップ・ステップ・キャンパスの様子。

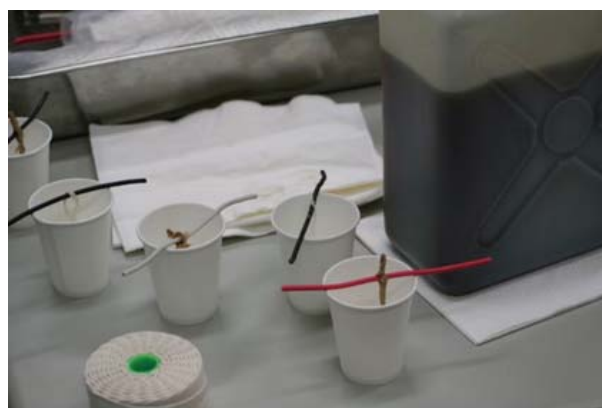


図3 実験の様子（その1）。



図4 実験の様子（その2）.

天体観測による地域貢献.

天体観測サークルは2008年当時、天体望遠鏡を扱える学生がおらず、観測を行うことができない状況にあった。本学のような理系の大学であれば、天体観測サークル以外の学生でも天体観測に興味を持っている学生が多いことが予測されるので、一般の学生向けに天体観測の仕方や天体望遠鏡の講習会を実施することにした。講習会の実施にあたって講師の選定や依頼は、学生から相談を廣田が担当した。こうして、2008年12月14日に秋田県総合教育センターの佐藤智幸教諭を講師に講習会が実施された。

天体望遠鏡の講習会の後、天体望遠鏡の使い方を習得した天体観測サークルは一般の学生向けに観測会を企画し、2009年5月30日に天体観測やその説明、天体観測に関するクイズ大会を自ら主体的に企画し、実施した。その後も天体観測を年に1回企画し、現在まで継続的に活動している。

これらの活動を通して主体的に行動することが身



図5 天体望遠鏡の勉強会の様子.



図6 ミニミニ科学教室にて月球儀の作成の様子.

に付き、前述のミニミニ科学教室にも毎年、テーマを提供するなど、多くの地域貢献活動につながった。

スコップレンジャー.

本学のある秋田県は近年見られる異常気象により、沿岸地域においても積雪が多い。本荘キャンパスのある由利本荘市においても例外ではない。また、由利本荘市は秋田県内でも最も面積が広く、積雪の多い内陸部も同市に含まれる。

本学の約半数の学生は雪の降らない地域の出身であり、海外からの留学生の学生はほとんど雪の降らない地域の出身である。

2011年、12月下旬以降、強い冬型の気圧配置が続いたため大雪となり、積雪の多い状態が続いた。特に1月からは、由利本荘市を含む南部を中心に「平成18年豪雪」を超える積雪となった。このような事から地域の方々から除雪のボランティアに従事してくれる学生のニーズが高くなった。そこで、薫風・満天フィールド交流塾の企画として、全学生へ除雪ボランティアを募集した。当初は、ボランティアに従事してくれる学生を集めることに困難が予想されたが、多くの学生が雪の降らない地域の出身であったことが幸いして、20名を超える学生が除雪ボランティアとして自主的に登録してくれた。なお、スコップレンジャーという名称は2011年当時、学生チームの佐藤琢磨氏が、雪害を未然に防ぐという意味を込めて命名したもので、名称の親しみ易さから参加を決意した学生もいる。

除雪ボランティアは、除雪という雪国では普段の生活を通じて、地域の方々と触れ合うことができる。

特に大学生のような若者にとって地域の高齢者と触れ合うことができる貴重な機会になっている。また除雪作業後、高齢者の方々は必ずお礼を伝えてくれ、時には休憩時間にお菓子を差し入れてくれ、その際にも感謝の気持ちを直接学生に伝えてくれる。これにより学生は達成感を得ることができ、継続的にこの活動に協力するようになっている。



図7 スコップレンジャー活動の様子。

ふるさと学び舎の夏祭りのボランティア。

社会福祉法人中央会が運営する特別養護老人ホームふるさと学び舎は、本荘キャンパスから最も近く、お隣同士の関係にある施設である。ふるさと学び舎では、毎年お盆前に、納涼のための夏祭りを開催している。この祭りは、入居者とその家族が、生ビールを片手に涼を取りながら、舞台余興や会話、交流を楽しむことを目的としている。

本学では、学生教育と研究活動の一環として、2008年から当該施設との交流に取り組んでいた。その中で、前所長の今野氏から、夏祭りでのボランティアを依頼された。公印入りの依頼状を、所長自らが手渡しで大学に届けてくれるという熱意のこもった要請を受けて、2009年から2011年までの3年間に渡って、学生が中心となりボランティア活動に従事した。

当時は、up←Aなどのボランティアサークルが存在しておらずボランティアを行う気運も高くはなく、加えて夏祭りの開催日が前期試験終了後の夏休み期間中ということもあり、ボランティアに従事してくれる学生を集めることに困難が予測された。このため、薫風・満天フィールド交流塾へ協力の依頼があ

り、ボランティアの募集について支援を行った。支援内容としてはメールによる告知やポスターを学内に掲示することであったが、ポスターの作成やメールの文面の作成は、学生自身が担当した。こうして募集したボランティアには、多数の女子学生の応募があった。男子学生の比率が高い本キャンパスにおいて、異例の割合であった。ボランティア活動に対する積極性に関しては女子学生の方が高いことが伺える。

ボランティアの活動内容としては、会場の準備や片付けや配膳、生ビールを中心としたドリンク類の給仕を依頼された。また、今野前所長が楽器（特にギター）好きだったこともあって、余興の担当も依頼された。これは当初の予定にない内容で、当然ボランティアの募集要項にも明記されていなかった。そのため学生も当初は引き受けるかどうかについて躊躇したようであるが、学生間での相談の結果、ステージで何かしてみたいという意見が多数を占めたため、快諾したようである。元々は人前で余興をするほどの積極性は持ち合わせていなかったため、一旦は躊躇したが、この問題に学生たちが自ら主体的に議論し解決した部分にこの活動による教育効果をみることができると感じる。

ボランティアに余興が加わったことにより、ボランティア活動の負担は増え、事前打合せの回数も増えたが、自分たちで考え決定した活動なので、不満を言うわけでもなく、歌や踊りの準備に熱心に取り組んでいた。なお、余談であるが、リハーサルという名目で特別使用が認められていた機械知能システム学科会議室から、夜な夜な歌声が聞こえてくる状況で、大学内に明るい雰囲気を与えてくれた。

夏祭り当日は自主的にゆかた姿で参加するなど、夏祭りを意識しつつ、会場の準備、配膳、給仕などに、明るいうちから汗を流していた。いつの間にか最重要ミッションになっていた余興は、結果的には大盛況で、入居者やその家族、施設のスタッフなどの大勢の人に楽しんでもらっていた。これにより、大きな達成感が得られたと感じられる。なお実際の余興の様子を図8に与える。

アクティブ・ラーニングという観点からは、元々好奇心が旺盛でかつ積極的でコミュニケーション能

力の高い学生が集まってくれたという状況であったため、教員のサポートは全く不要であったが、活動中に生じる様々な困難に対して、主体的に行動し解決したため、学生の主体性や積極性は向上していることが期待できる。実際その後もボランティア学生半数以上が、3年に渡って継続的に参加した。教員の目線から見ても、本活動を通じて、参加学生らの能力に磨きがかかったと感ぜられる。



図8 ゆかた姿でのステージ余興の様子。

被災地支援

東日本大震災の後、復興支援を目的に学生が主体的に結成した全学的組織がup←Aである。up←Aは独自に仮設住宅への支援を行い、その活動を通して被災地の方々がどのような支援を期待しているか調査を行った。その調査を基に、それまでよりも大規模な支援として、気仙沼にて炊き出しと科学教室、音楽系サークルのコンサートの実施を企画した。この企画はup←A単独では金銭的にも人的にも困難であったため、薫風・満天フィールド交流塾へ協力が依頼された。この依頼を受け、工作ブースの担当教員の募集、学生ボランティアの募集、移動手段の確保などをサポートした。この活動には、本荘キャンパスから75名、秋田キャンパスから11名の合計86名の学生が参加し、教職員も26名が参加した。up←Aの学生は企画の実施にあたり、参加した大人数のボランティアの学生を適切に配置し、指示を出して行動してもらう必要があり、普段教室で体験しにくいグループでの仕事の仕方を学んだ。ボランティアの学生は各担当において、少ない指示を基にどう行動すべきか、主体的に考える必要があり、貴重な

経験ができたと感じられた。



図9 被災地支援の様子。

まとめ

本荘キャンパスの薫風・満天フィールド交流塾では、多くの地域貢献活動を実施してきた（これまでの活動は付録Aから付録Eの通りである）。学生が主体的に始めた活動もあれば、最初は教員が企画しそれが学生の主体的な活動につながった活動もある。どちらにせよ、それらの活動を通して学生の主体性を伸ばすことができた。最後に秋田県立大学薫風・満天フィールド交流塾運営チーム（2012）に寄稿された学生からの活動報告から主体的学修に関連の深い部分を抜粋して紹介する。

スノーウォーズを企画した郷右近泰成君は「計画を進めていくうちに開催日時はいつにするか、場所はどこが良いか、ルールはどうするか、必要な道具は何か、当日の日程と役割分担はどうするべきかなど、考えることが多くなっていった。（中略）雪合戦の計画や準備は楽な仕事とはいえない内容だった。しかし企画が成功したとき、今までの苦労が一瞬で吹き飛ばすような充実感と達成感を得ることができた」と語っており、様々な困難を主体的に解決し、それにより大きな充実感と達成感を得たことを告白している。また、天体観測を企画した加藤圭亮君は「印象に残っている活動は、参加者が100人を超える観望会です。天体観測サークルの人々だけではとてもさばける人数ではありません。そこで、ウインドミルサークルにもスタッフとして参加してもらい、

なんとかイベントを無事に開催することができました。(中略) イベントに関してのタイムスケジュールやスタッフの行動など事前に打ち合わせはしていましたが、完璧に行動出来たとはいえないと思っています。(中略) しかし、得たものもあります。それはこのような大きなイベントを開催する際の企画力や、行動力です。次に開催するどんなイベントにも対応できる力がついたと思います。」と述べており、企画力と行動力が向上したと実感している。ふるさと学び舎の夏祭りボランティアに参加した本間謙也君は「今年度で2度目の参加となり、会場の準備や料理の配膳のほかに、入居者とのコミュニケーションが活発にできたと感じた。(中略) 普段ではあまり機会のないご年配の方と話をすることで、自身の接し方やコミュニケーションの仕方など考えさせられることもあり、有意義な体験をすることができた。また、ボランティアに参加したメンバーと共に、夏祭りを円滑に運営できたことや余興の出し物で会場を盛り上げられたことに気持ちの良い達成感を感じた」と述べている。回数を重ねるごとに前年の問題を解決し、よりよい活動へと発展させていることが伺える。

以上のように、著者らは薫風・満天フィールド交流塾の活動が、様々な形で学生の主体的な問題解決能力を向上させていると考える。また薫風の活動で養われた主体性は、教室でのアクティブ・ラーニングに結びついていると期待できる。今後はアンケート調査によって、より具体的に効果を評価したい。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、熊谷明子氏、石塚幸一郎氏には本交流塾の企画・立案から実施まで多大なご尽力を頂きました。また、本学の佐藤琢麻氏、今村陽介氏、石田小百合氏、田中理恵氏、三浦隆士氏、櫻井真人氏、八木恭子氏には本交流塾の活動に賛同され、数多くご協力頂きました。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

文献

- 秋田県立大学薫風・満天フィールド交流塾運営チーム (2012). 「薫風・満天フィールド交流塾平成 19-22 年度活動報告書」(1-135). 秋田県立大学.
- 秋田県立大学薫風・満天フィールド交流塾 (2013). 「薫風・満天フィールド交流塾平成 23-24 年度活動報告書」(1-50). 秋田県立大学.
- 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 (2012). 文部科学省. 「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」(1-18).
- 石田靖彦, 亀山圭介 (2006). 「中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』9, 219-225.

〔平成 25 年 11 月 29 日受付〕
〔平成 25 年 12 月 11 日受理〕

付録 A

2008 年度の活動

日時	活動名	参加者数
12/14	天体観測	25 名
1/25	ホップ・ステップ・キャンパス	14 名
2/4	掛魚まつり見学	3 名
2/12	タラ鍋づくり体験	35 名
2/17	スノーウォーズ	30 名

付録 B

2009 年度の活動

日時	活動名	参加者数
4/29, 5/16	ボート体験	36 名
5/30	天体観測	14 名
1/9, 10	環境教育講座	5 名
1/31	廃油からのろうそくづくり	11 名
2/12	スノーウォーズ	14 名
2/16	かまくら見学・ みそたんぼ作り	15 名
2/19	水泳・高飛び込み	5 名

付録 C

2010 年度の活動

日時	活動名	参加者数
5/15	山菜取り	13 名
5/15	春の天体観測	100 名
5/29, 6/26	ボート体験	53 名
8/1	子吉川の自然体験	14 名
9/12	子吉川レガッタ 2010	10 名
9/18	環境教育指導者養成講座	2 名
12/26	冬の星座観測会	13 名
1/30	ホップ・ステップ・キャン パス, ミニミニ科学教室	23 名
2/2	自己表現セミナー	7 名
2/18	高飛び込み・着衣水泳体験	6 名
2/19	歩くスキー体験	9 名

付録 D

2011 年度の活動

日時	活動名	参加者数
7/3	ボート体験会	21 名
7/16	オープンキャンパス	243 名
7/23, 24	SPORTS FESTIVAL	200 名
8/6	鳥海高原由利原まつり	37 名
8/6	科学教室「科学のひろば」	99 名
8/6	ふるさと学舎夏祭り	13 名
8/7	工作教室	83 名
9/3	天体観測	50 名
9/11	子吉川レガッタ	18 名
9/23	知能ロボコン in 県立大学	20 名
10/9, 16	学園祭 キャンパス間交流	30 名
11/3	環境教育プロジェクト	9 名
11/26	東日本震災復興支援 プロジェクト	90 名
12/3	本荘キャンパスライブ 応援調理実習 ～お菓子作り教室～	15 名
12/22	クリスマスパーティー	100 名
1/21	天体観測	7 名
1/28	除雪ボランティア	13 名
1/29	ホップ・ステップ・ キャンパス	110 名
2/16	除雪ボランティア	24 名
2/17	除雪ボランティア	12 名
2/19	鳥海高原雪祭り	25 名
3/1	除雪ボランティア	23 名

付録 E

2012 年度の活動

日時	活動名	参加者数
5/12	東日本大震災復興支援 in 仙台	50 名
5/13	山菜採り, 鬼ごっこ, バーベキュー	31 名
5/21	金環日食観測会	41 名
5/26~	鳥海高原菜の花まつり	108 名
5/26	国際教養大学・県立大学合同運動会	30 名
6/8	コミュニケーション能力セミナー「人を巻き込む聴き方・話し方」	140 名
6/24	東日本大震災復興支援 in 仙台	80 名
7/7	竹割りから始めるそうめん	22 名
7/7	ボート体験会	7 名
7/8	東日本大震災復興支援 in 仙台	22 名
9/9	子吉川レガッタ	25 名
10/19	コミュニケーション能力セミナー「人を巻き込む聴き方・話し方」	15 名
10/20	コミュニケーション能力セミナー「人を巻き込む聴き方・話し方」	40 名
11/3	子育て支援ボランティア@仙台	8 名
11/4	科学教室	28 名
11/8	公大協学長会議 (学生派遣)	2 名
11/18	Project WILD	9 名
11/24	気仙沼市鹿折地区炊き出し, 工作教室	34 名
12/21	クリスマスパーティー	70 名
1/12	鍋フェス	94 名
1/27	ホップ・ステップ・キャンパス	42 名
2/21	女子力 UP 講座	19 名
2/22	スコップレンジャー	11 名
3/13, 14, 26, 27	新入生対象スチューデントカフェ	31 名
4/4	新一年生親睦会	176 名

Regional Contributions and Education of the Kunpu-Manten Field Experience Office at Honjo Campus —Toward Effective Active Learning—

Chiaki Hirota¹, Yuki Terata¹, Hirokazu Madokoro², Nobuhiro Kanazawa³, Shigemitsu Shuchi²

¹ *Department of Electronics and Information Systems, Faculty of System Science and Technology, Akita Prefectural University*

² *Department of Machine Intelligence and Systems, Faculty of System Science and Technology, Akita Prefectural University*

³ *Department of Management Science and Engineering, Faculty of System Science and Technology, Akita Prefectural University*

The project of the Kunpu-Manten Field Experience Office was launched in 2007 as a Good Practice (GP) to support students. Initially, this project was conducted by the Department of Agribusiness. Since the Honjo Campus joined the office officially in 2008, we have been conducting this project on each campus supported by our Akita Prefectural University. The project seeks to improve each student's communication skills through active learning, and it enables participation by students who have weak awareness of study skills. In recent years, university education has come to require students to learn proactively. Therefore, we considered a program that can strengthen the self-imposed task of students participating in the project. The most effective method for education that strengthens self-imposed task is this project's regional contribution activities because regional contribution activities easily achieve a sense of accomplishment and competence. In fact, we found that the program was successful and that the students' self-imposed task improved; therefore, the program has developed many activities. This study describes our vision, mission, and practical examples of this project, and its effects in achieving active learning. First, we explain how we began this project at our campus. Next, we describe several examples, especially in regional volunteer activities. Finally, we report outcomes and our plans for the project's future.

Keywords: Active Learning, Extracurricular Activities, Volunteer